

## 五人の悪の巨人

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

第2次世界大戦中の1942年に発表されたウィリアム・ビヴァリッジの『社会保険および関連サービス』（いわゆるビヴァリッジ報告）は、福祉国家の設計図を描いた画期的な文書である。その中で、ビヴァリッジは、社会保障は五人の悪の巨人に対する戦いであると宣言した。五人の悪の巨人とは、窮乏（Want）、疾病（Disease）、無知（Ignorance）、ホームレス（Squalor）、失業（Idleness）を指す。イギリスの社会保障制度は、年金、医療、教育、住宅、雇用の五つの分野を覆うからである。

16世紀フランスの作家、フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュワとパンタグリユエルの物語』は、空想的巨人の物語であるが、おそらくこの物語を想起してのことであろう、ビヴァリッジ報告が発表された当時のイギリスの新聞『デイリー・ヘラルド』には、小さなビヴァリッジが見上げるような五人の巨人と戦っている漫画が載っている。次ページの絵がそれである。

ビヴァリッジの社会保障構想は、五人の巨人を相手に戦うような巨大事業であった。厳しい戦時生活の彼方に希望の時代を展望することは、国民に勇気と活力を与えるものであって、その壮大な計画には拍手が送られると同時に、疲弊した経済力から見てとてもできそうにない夢物語と受け取られたことであろう。漫画は福祉国家の将来を予言していたように見える。ラブレーの物語によれば、ガルガンチュワ巨大王とその息子のパンタグリユエルは、鯨飲馬食し、住民を飢餓に追いやった。その比喩通りに、社会保障制度はいまや膨大な予算を飲み込む八岐大蛇のような存在になっ

た。それに加えて、少子高齢化の趨勢の中で、第六番目の巨人として要介護高齢者の大群が現われ、巨人群と戦うビヴァリッジの姿がますます小さくなっている。福祉国家に将来はあるのだろうか。

イギリスのブレア首相のブレインといわれたアンソニー・ギデンズは、「第三の道」として、ポジティブ・ウェルフェアという考えを唱えた。これは社会的弱者に対して消極的な受け身の施策をするのではなく、積極的に個人の能力や機会を開発するというものである。ギデンズは、ビヴァリッジが「悪」の巨人としてネガティブな要素を挙げたのに対し、ポジティブな「善」の要素を対置した。窮乏に対して自律（Autonomy）を、疾病に対して健康（Active health）を、無知に対して教育（Education）を、ホームレスに対して快適（Well-being）を、失業に対して創意（Initiative）を置いた。このような観点の転換はどのようになされるのであろうか。そのためにはしっかりとした道徳理論が必要であるが、社会学者ギデンズはそれを論じていない。

私の考えでは、社会保障の出発点は、人間存在の要求としての基礎的ニーズの保障である。基礎的ニーズの欠如は、人間としての能力の発揮を不可能にしてしまう。これについて、ネガティブ・ウェルフェアの考え方は、能力の欠如を補うために、悪の巨人から人間を守る「セーフティー・ネット」を提供しようとする。他方、ポジティブ・ウェルフェアの考え方は、人間の能力の発揮を支え、自己実現の機会をつくり出すように「スプリングボード」を提供しようとする。社会的弱者への憐憫の情や人道主義に訴えるだけでは、社会保



出所 Nicholas Timmins, *The Five Giants: A Biography of the Welfare State*, London: Fontana Press, 1996 (George Whitelaw, *Daily Herald*, December 1942).

障はポジティブ・ウェルフェアにはならない。せいぜい最低限のネガティブ・ウェルフェアが得られるにすぎない。人間の能力を開発し、自己実現を図ることを目的とするポジティブ・ウェルフェアは、存在の倫理学としての徳や卓越の理論を基礎にしなければならない。

それでは、徳や卓越の倫理学の基礎は何であろうか。人間存在の意味を問う存在論が必要ではないだろうか。そこでハイデガーにそくして議論を立ててみよう。彼は存在している一切のものの存在の意味を問うために、人間存在に着目する。人間は他のものと違って、存在の意味を問うことのできる唯一の存在だからである。そして人間が自己の実存する姿をどのように理解しているかが問われる。ハイデガーは、人間存在を特徴づける契機は「関心」ないし「気遣い」であり、その存在の意味は「時間」であるという、ただちには理解しがたい哲学的命題を主張する。これは、人間が自己、他者、および世界に対してかかわりを持つのは関心のゆえであり、関心を通ずる存在の理解は、過去・現在・将来という時間軸に応じて規定されると考えるからである。時間性によって規定された有限の人間は「死に至る存在」であり、それゆえに「不安」という気分が心の基本的状態であるとみなされる。人間は死によって規定づけられた生の不安の中で、生の有限性と自己の非力の認識を梃子として、初めて自己の本来のあり方への努力に導かれる。人間存在の理解は、自己の多

様な存在可能性を展望し実践すること、すなわち自己を将来に向けて投企することである。ところが世間の日常性の中に埋没している人間は、世界内存在として世界の中に投げ込まれており、非本来的なあり方に終わっている。

この議論を背景にして、上述の悪の巨人に立ち返ると、窮乏、疾病、無知、ホームレス、失業、要介護などは、誰もが実存的存在として漠然と抱いている「不安」の代表的なものである。かりに自分が今それらの不安要因とは無関係であるといっても、それは時間性の座標軸から見て偶然のことにすぎない。死は誰にも避けることのできない普遍的な事象であり、生きている人間は本来欠陥だらけの存在である。欠陥にもかかわらず、人間が生き延びているのは、開かれた可能性を少しでも実現するように行為しているからであり、その結果として未成熟性という欠陥が軽減されるのである。悪の巨人たちは、本来人間につきまといがちな欠陥に他ならない。人間は努力なしに生まれたままの状態であれば、結果として悪の巨人に征服されてしまうのである。彼らを絶滅しようとして彼らに戦いを挑むのは見当違いである。彼らを絶滅するためには、ポジティブ・ウェルフェアの思想のように、人間の可能性を開発するという別の戦いに従事することが不可欠である。

しおのや・ゆういち 財団法人家計経済研究所 会長・一橋大学名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。